

フィールドスタディⅡ

成果レポート

月曜日 2 限
桑島京子 教授

観光の視座から見た泰緬鉄道の歴史

青山学院大学地球社会共生学部地球社会共生学科 3 年

学籍番号：1A115105

名前：小松美凜

留学先：マヒドン大学リベラルアーツ学部

提出日 2017 年 6 月 12 日

1. 調査概要

東南アジアで共生について考える際、第二次世界大戦における日本の行為は避けては通れないテーマだといえる。そこで、私は第二次世界大戦中の日本の非道な行為の記憶が残るカンチャナブリについて調査した。カンチャナブリ県はバンコクから西に約 110 キロの場所に位置する。ここは 2011 年には約 574 万人の観光客が訪れる¹、タイ中部地域での有数の観光地だ。例を挙げるならば、エラワンの滝を始めとするエコツアーやエレファントトレッキング、ムアン・シン歴史公園などの歴史遺跡がタイ政府観光庁によって紹介されている。そして、このカンチャナブリの観光に一役買っているのが泰緬鉄道の存在だ。

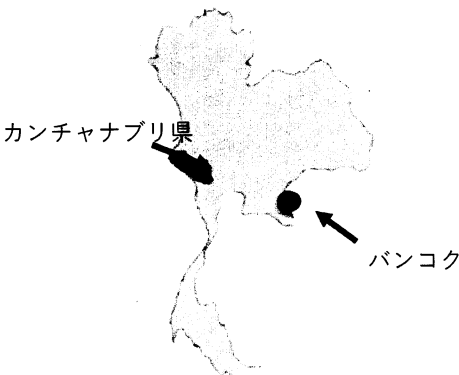
泰緬鉄道とはタイとミャンマーを結ぶ為に日本軍によって建設された鉄道を指す。1942 年、日本軍はこの鉄道の建設の為に、捕虜であったイギリス人、オーストラリア人、アメリカ人、そして現地のタイ人やミャンマー人を労働力として動員した。その際の劣悪な労働環境によって約 9 万人の死者や多数の病人を出したことが戦後、映画『戦場にかける橋』によって社会に知れ渡ることになる。それと同時にこの鉄道を目的にカンチャナブリを訪れる観光客が増加することとなり、今では重要な観光資源のひとつとなったのだ²。

私は、カンチャナブリの観光での泰緬鉄道の位置づけに興味を持った。具体的に私が注目したのは、カンチャナブリを訪れるタイ人と外国人の観光目的の違いである。調査内容としては、文献調査、参与観察としてのタイ人学生との観光への参加、またカンチャナブリを訪れた外国人二人へのインフォーマルインタビューを行った。さらに、泰緬鉄道に関する展示のある JEATH 戦争博物館と泰緬鉄道博物館を訪問した。

2. 調査結果

このセクションは文献調査と実地調査のふたつに分かれている。私は、調査の結果この両者に大きな違いがあることを発見した。

まず、統計を分析すると³、タイ人と外国人観光客の間では興味のある観光地が異なるということ



図表 1. タイ全土の地図

観光場所	タイ人	外国人	合計
クウェー川鉄橋	484	6268	4941
エラワンの滝	2233	1077	2151
サイヨーク・ヤイ滝	2292	0	213
連合軍共同墓地	1619	521	1873
ヒンダート温泉	912	0	848
クラセー洞窟	8	0	743
サイヨーク・ノイ滝	719	144	679
パータート滝	705	0	655
シーナカリン・ダム	674	055	631
タイガーテンプル	426	558	435
ワット・タムカオープン	324	12	309
ムアン・シン歴史公園	226	0	21

図表 2. タイ人外国人別の訪問場所 (%)
2007 年カンチャナブリ観光統計

1 Knoema. Kanchanaburi Province-Number of Visitors.
2. Felix Puelm. “The Bridge on the River Kwai” - Memory Culture on World War II as a Product of Mass Tourism and a Hollywood Movie. pp.54-59
3Tourism Authority of Thailand.Internal Tourism in Kanchanaburi, 2007

がわかった。図表2はタイ人と外国人観光客、それぞれが足を運んだ場所を割合別で示したものである。両者ともクウェー川鉄橋を訪れる点では共通している。だが、サイヨーク・ヤイ滝、ヒンダート温泉などの自然観光資源について、タイ人は一定の割合の人数が訪れる一方、外国人はほぼ姿を見せていない。さらに、連合軍共同墓地には52.1%もの外国人が足を踏み入れている。このことから、タイ人は自然アクティビティ、外国人は泰緬鉄道を観光の目的としているのではという仮説が成り立つ。

次に、行ったのはタイ人と日本人のグループでの観光だ。私はバンコクのトンブリー駅からナムトゥック駅間を往復する鉄道ツアーに参加した。終点であるナムトゥック駅の周辺にはサイ・ヨークノイ滝があり、多くの乗客の目的地はその滝であるようだ。つまりこのツアーの主要目的は自然観光資源だといえるだろう。さらに、もうひとつ着目する点がある。途中アルヒル栈道と呼ばれる地点を通過したときだ。この場所は泰緬鉄道の歴史からいえば、鉄道建設の難所で多くの労働者が命を落とした場所と言われている。しかしながら、タイ人の間ではこの地点の岩壁に触れば願いが叶うという噂で知られており、多くの乗客が窓から手を伸ばしていた。すなわち、泰緬鉄道の歴史よりもフォーチュンスポットとしての色が濃かったのだ。

今度は、カンチャナブリを観光していた外国人へのインタビュー結果である。私が話を伺ったのはアメリカ人の男性とクロアチア人の男性だった。前者がカンチャナブリを訪れた目的は、ミャンマーへの国境越えだった。また時間が許すかぎり街を散策し、時間があれば戦争に関する博物館にも足を運ぶ予定と回答した。クロアチア人の男性は、歴史が好きなので博物館にも立ち寄りたいと答えながらも、滞在中の大きな目的は“エラワンの滝”に行くことだと言った。つまり両者とも泰緬鉄道の歴史に興味があって訪れたわけではなかった。

調査結果をまとめると、文献調査の上ではタイ人と外国人では、外国人のほうが泰緬鉄道の歴史に興味があるようにみえた。しかし、実地調査を行ってみたところ、タイ人も外国人も必ずしも泰緬鉄道の歴史を目的としていないと分析できる。

3. 考察

以上の調査結果から私が気になる点は、なぜ文献調査と現実とでは結果が異なったのかという点だ。そこでもう一度文献調査に立ち返ってみた。Rungchawannont(2015)は、鉄道に関連する博物館が「日本との共同事業者であったタイ人」よりも「欧米の捕虜」に焦点を当てていること(p.87)に言及している。さらに、それによって、タイ人は泰緬鉄道を自分達と直接関わりのない歴史だと「認識」していること(p.91)、そして現地の人々が泰緬鉄道を「負の遺産」ではなく「有名な観光資源」として描いていることが指摘されている(p.88)。この現地の人々、つまりタイ人にとっての歴史認識というのは、泰緬鉄道の観光名所化において重要な要素かもしれない。ところが、彼の結論は、私が出会ったような「鉄道の歴史を目的としない外国人」については語っていない。その点を踏まえると、タイ人の歴史認識がカンチャナブリを訪れる外国人観光客にどのように影響するのかを調べる必要があるだろう。

参考文献

Felix Puelm *The Bridge on the River Kwai” - Memory Culture on World War II as a Product of Mass*
Retrieved from <http://www.human.ru.ac.th/grad/images/pdf/2558-4-2/FelixPuelm.pdf> (検索日
2017年6月8日) pp.54-59

Knoema. Kanchanaburi Province-Number of Visitors. Retrieved from
<https://knoema.com/atlas/Thailand/kanchanaburi-Province/Number-of-Visitors> (検索日 2017年
6月9日)

Monsicha Rungchawannont(2015)*A journey to the past-An analysis of the contemporary display of
the Death Railway, Thailand* . Retrieved from
[/openaccess.leidenuniv.nl/bitstream/handle/1887/35525/FinalFinalDeathRailway.pdf?sequence
=1](https://openaccess.leidenuniv.nl/bitstream/handle/1887/35525/FinalFinalDeathRailway.pdf?sequence=1) (検索日 2017年6月9日) pp.10, 87-94

Tourism Authority of Thailand (2007). Internal Tourism in Kanchanaburi